

日本留学 30 年後～ラテンアメリカ出身者の事例研究～

田中京子

英文タイトル : 30 Years After: Case study of Latin American students concerning the effects and influences of their study in Japan

要旨 :

This article examines cases of former students from Latin America who, after studying in Japan approximately 30 years ago, returned to their home country. They were interviewed at their homes and offices in their native country, with enquiries made about their course of career and life, and how their study experience in Japan has influenced their life and been transmitted to society and/or younger generations.

Their later career and life vary according to factors such as their major, their gender, whether they are Japanese descendents or not, their family conditions, their personal environment, etc. There are effects and influences reported as being the consequence of the many years spent, and some of their characteristics are deemed to have originated from the cultural traits of the Latin American region, which are considered to be extremely different from Japanese cultural traits.

After approximately 30 years, all of the former students interviewed seem to have positively assimilated the experience of studying in Japan, and they try as hard as possible to contribute to the education of younger generations, as well as to the improvement of their work environment and society at large.

The effects and influences of studying abroad should be evaluated over a term of at least 30 years, as long-term and comprehensive perspectives are vital when assessing a new study-abroad policy.

1. はじめに

留学経験は、留学中はもとより留学後も個人や社会に様々な影響を与える。留学の効果を検討するにあたっては、留学中・留学後の個人の進路や社会への影響を総合的に考察する必要がある。留学が一般的に青年期に行われることを考えれば、その 20 年後、30 年後という、仕事でも生活でも経験を積んで活躍でき、周りへも影響力が強いと思われる壮年期に、元留学生たちが留学経験をどのように生かし、留学効果がどのように波及しているかを検証するのは意義深いことである。

日本留学の長期的影響や効果については、岩男・萩原（1988）によって、留学後 10 年の元留学生を対象として 1985 年に大規模なアンケート調査が行われ、その結果は、日本

滞在中の留学生を対象に行ったアンケート調査結果と比較分析され、面接調査の事例と合わせて報告されている。その後、権藤等（1991）、遠藤等（2002）、佐藤（2004）、最近では奈倉（2009）が元日本留学生に焦点をあて、留学後の進路について考察している。これまで行われた研究の対象となったのは、主にアジア地域内および欧米出身の元留学生についてであるが、岩男・萩原（1988:117）の中で述べられている「出身国と留学先との『文化的距離』が遠いほど適応が困難」という想定に基づけば、アジア・欧米以外の地域出身の留学生たちについては適応の様態も留学後の効果も異なることが考えられる。

田中（2010）は、日本留学の長期的影響・効果とその波及の状況を、ラテンアメリカの元留学生を対象に、面接調査をもとに考察し、そこには長期的に見たからこそわかる効果があること、また出身地域と日本の文化の特性も関係していることを述べた。本稿では、帰国後 20 数年から 30 年になる元留学生の事例を複数考察し、留学成果とその波及をさらに検討する。

2. ラテンアメリカ地域出身留学生の日本適応の特徴

ラテンアメリカは地理的、人種・民族的、経済的にも多様性に富んだ地域であるが、集団としてみる場合、人々の間には「ラテン的性格」として指摘できる価値体系が「相当に高い頻度で存在している」と言われている（中川・三田 1995:40）。

ラテンアメリカ出身者について日本留学中の研究・生活上の適応課題を調査した結果では（Tanaka 2003）、大多数の留学生が「日本文化と自文化は非常に異なる」と感じ、日本の大学の中では、共通言語の欠如や、人間関係とコミュニケーションスタイルの異質性について最も困難を感じていた。生活の中では、社会の治安のよさや交通機関の便利さを最も高く評価するものの、勤勉・規則遵守・公私の区別といった規律面について、これらを尊重すると同時に違和感も持っていた。

帰国後 10 年以上を経た元留学生たちへの面接調査（田中 2010）の中では、元留学生が日本で学んだ職業倫理や規律などをより高く評価し自分もそれを実践し周りの人々に伝えていること、人間関係やコミュニケーションスタイルについては、上下関係には馴染めないものの日本的高文脈コミュニケーション¹を認め大切に思う人が多いことがわかった。日本で非常に苦勞した元留学生たちや、帰国後すぐは仕事もなく悩んでいた元留学生たちも、それぞれに進路を拓いていき、現在はその専門性や価値観を、広い視野から周りの人々や次世代の人々に伝えていることがわかった。

3. 調査の概要

日本留学の長期的効果とその波及についての面接調査は、2007 年 4 月から 2009 年 3 月

にかけて、ペルー、メキシコ、アルゼンチン3国の数都市で、日本に1年半以上留学し、帰国後概ね10年以上を経た元留学生42名を対象に、主に元留学生の自宅または職場で行った（調査の詳細については田中2010を参照）。本稿では、帰国後20年以上を経た留学生13名のうち、専攻、学位取得の有無、性別、日系人か非日系人か、家族構成などの面で特徴的と思われる6名について、事例を紹介し考察する。（なお、名前や出身国、留学時期などは、個人を特定できない形で報告する。連絡がついた4人には予め記載内容を送付して、内容の確認と掲載への承認を得た。連絡がつかなかった2名については、匿名性をより高めた。）

4. 事例と考察

4-1 マリアさん（仮名）（非日系、女性、1970年代後半～80年代に5年間以上留学、社会科学系専攻研究生、帰国後約25年、現在教員・翻訳家）

小さな村で生まれ、貧しい家庭で多くの兄弟たちと共に育った。国の首都にも行ったことがなかったのに、留学が決まって渡日し、環境の激変に驚きとまどった。しかしラテンアメリカの友人たちや教員たちの援助を得ながら日本語を一生懸命勉強した。

やっと専門分野の修士課程への入学試験に合格した時には2年間の奨学金期間が終了してしまい、その後5年間、スペイン語を教えるアルバイトなどをしながら私費留学生として勉強を続けた。指導教員からは、結婚適齢期なのだから帰国して結婚するのがよい、と言われていたが、故郷の村や家族たちを助けるためにも頑張りたいという私の強い希望を伝えて勉強を続けた。結局学位がとれないまま、在留資格の更新もできなくなり、帰国することになった。

傷心の帰国であったうえに、帰国した時は国中でインフレがひどく仕事がない時期で、私も仕事が見つからず、日本のことは思い出したくないほど打ちのめされていた。しかし思い切って訪ねた日系の会社で何とか働けることになり、5年間わずかな給料で働いた。その後日本への出稼ぎが盛んになった1980年代後半に、自国出身の労働者たちの通訳として再渡日し、1年間働いた。労働者たちが社会や企業から差別を受けている状況を目の当たりにして、雇い主に抗議したりした。再び帰国して働いた後、また渡日してスペイン語を教えていたが、病気になり、帰国してそのままずっと自国にいる。学校で日本語を教える機会を得たことから、若者文化に興味を持ち、その後、別の学校で教員の仕事を10年以上続けている。生徒たちは日系人も非日系人もいて、日本に興味があるのでこの学校で学んでいる。

留学直後は自分が留学生生活を無為に過ごしたと感じて自己嫌悪にも陥ったが、今では、留学で多くを学んだと感じるようになった。小さな村で、親元で生活していた私が、独立した人間として大きく成長し、日本語を学んだおかげで、例えば自国の歴史にしても、日本語で書かれた歴史書が読めるので別の視点から物事を見ることができる。日本語は私の「知識の源泉」といえる。

日本で学んだこととして、他人のことを気遣いながら振る舞うということがある。そんな私

の態度を見て生徒たちから「先生は日本人か？」と聞かれることもあり、生徒たちにも人への配慮ということを教えている。人と衝突することがあっても、自分にも他人にも厳しくしている。

アニメの翻訳の仕事もしており、宮崎駿のアニメなどは人気があって、定期上映会には多くの人々が集まる。若者たちが、翻訳を通して日本文化に触れられることもとてもうれしく思う。

日本留学をしたことで、自国のよい面を高く評価するようになった。日本人もよく働くが、自国の人々も本当によく努力している。仕事が見つからないときでも、路上でバスの往來を機敏に助けたり、選挙の時に投票所を調べて教えたり、投票後にアルコールを含ませたコットンを渡して指をふけるようにしたり、そんな小さな仕事を見つけ出してチップをもらって何とか生活している人もいる。日本のアニメ「螢の墓」を生徒たちに見せると、どうしてこんな悲しいのを見せるのかと言われるが、「日本も何もなかった時代があるけれど、一生懸命働いて今のような豊かな社会になった。私たちの国でも頑張って勉強しなければいけない」と生徒たちを励ましている。私は帰国後結婚したがやがて離婚し、子どももいないが、各自がその持ち場からできることをしていくべきと考えており、私も教員という立場から、少しでも貢献したいと思っている。

一緒に留学した人の中には、留学後アメリカ合衆国へ行ってそのまま自国へは帰国しなかった人もいる。彼らは豊かな生活をしているが、私の考えでは、日本政府が母国発展のために多くの負担をしてこのような留学の機会を与えてくれたので、少なくとも1年間ぐらいは自国で、家族や社会に留学の成果を伝えていくべきではないか。また機会があれば、大好きな日本へ行きたいと思っている。

マリアさんは、面接をした元留学生たちの中でも特に、当初から頻繁に連絡をとり、約束時間より前に面接場所に到着して準備をしてくれていた一人である。留学できたことにたいへん感謝しているので、自分の経験が何かの役にたつのなら、と言って協力してくれた。先住民系の容姿を持ち、その服装や態度から、質素に誠実に生活している様子がうかがわれた。

日本滞在中は日本語習得や異文化適応に、帰国後は自国の政治・経済状況の影響を受けて非常に苦勞したが、30年近くを経てその苦勞は喜びに変わったようである。現在では日本への郷愁の気持ちが強く、またぜひ行きたいと感じている。しかし厳しい家庭環境の中で育ち、自国の経済状況を身近に感じていることから、留学の成果を、自国のため、特に貧しい人々や弱い人々のために活かしたいという強い意思が感じられた。日本のアニメや漫画が注目されている時代にあって、学んだ日本語や日本文化への理解を大いに生かし、それを更新しつつ、自国の子どもたちや若者に伝えることに生きがいを感じていた。

専門研究の面では目的が達成できなかったが、日本留学をきっかけに人間として大きく成長し、一般庶民への日本文化の普及という面で長期にわたって貢献している事例である。

4-2 シルビアさん（仮名）（非日系、女性、1980年代に2年間留学、自然科学系専攻修士学位取得、帰国後20数年、現在大学教員・研究者）

留学中は指導教員初め周りの人々に恵まれ、病気で苦しい思いもしたが、研究面で恵まれた生活を送ることができた。指導教員は著名な研究者で、指導生たちを世界で通用する研究者に育てるため、厳しく指導してくれた。国際学会に何度も参加できたし、英語力をつけるために個人講師もつけてもらえた。指導教員は忙しい中、私の生活面にも配慮してくれて、真の「先生」と言える人だった。

留学中結婚して妊娠したので、修士の学位だけ取って帰国して子どもを生んだ。その後博士課程進学のためまた渡日したかったが、関係者からは「この国の社会状況から見ると、既婚女性が留学するには、まず離婚すること、そして子どもは夫の元に残して一人で渡日することが必要ではないか。勿論それぞれの人生なので自分で決断するように。」とアドバイスをもらい、よく考えた末、再渡日をあきらめた。しかし結局、自国も日本と似て男性優位社会²で、今では夫と離婚している。

帰国後すぐに大学の研究職を得て、そこから他の外国へ研究留学をしたり頻繁に海外出張したりしている。しかし、他のどの国での留学・研究にも増して、日本留学が周りから最も高く評価される。現在に至るまで、日本に留学していたと言うと、どこでも扉が開かれて「どうぞお通りください」となる。「日本製の〇〇人研究者」と紹介されることもあり、日本で勉強したことを、喜び・誇りに感じている。

日本のシステムとその効率的な運用が自国で非常に高く評価されており、知識面だけでなく、規律、誠実さ、尊重し合うこと、チームワークなど学ぶべき点が多くある。私も帰国後はそのような価値観を大切にして実践し、職場に取り入れるようにしている。このような努力は職場でも高く評価されている。

家庭でも、子どもたちは日本の食べ物や習慣と親しみながら成長し、一人は日本に留学したいと言って準備している。子どもたちには、勉強だけではなく、楽器を弾いたりスポーツに親しんだりして、日本の若者たちとも対等に接することができる教養をつけるようにしている。

現在このようによい仕事ができるのは日本留学のおかげだと思っている。指導教員とは連絡が途絶えてしまったが、何をもっても恩返しができないほど感謝している。

シルビアさんとは職場で会い、同僚や学生たちから信頼を得て、恵まれた環境で充実感を持って仕事をしている様子がうかがわれた。

日本留学中人々に非常に好意的に受け入れられたようである。20歳代前半という若さで、年上の著名な指導教員初め教員たちからの指導に対して、受け入れ従おうという姿勢があってそれが周りの人々に伝わったことによるのかもしれない³。彼女の欧米系の容姿が影響したことも考えられる⁴。帰国後20数年間、留学によって得た専門研究の内容を役立てているだけでなく、

日本留学の経験によって周りから高く評価され、自己肯定感も強く持ち続けていた。留学後も一貫して、日本特有と思われる倫理観や価値観を評価し、職場や家庭でそれを実践し伝えていきながら生活している様子だった。家庭の事情や社会情勢から博士課程に進めなかったことを残念に思っているようだが、国際的に活躍していた。

個人生活では、離婚したが子どもたちが健全に成長し、充実感を持って生活している様子うかがわれた。時間の制約によって実現はしなかったが、面接後、郷土料理を作るので滞在中に自宅を訪問してほしい、と筆者たちを招待してくれた。

4-3 ルルデスさん（仮名）（日系、女性、1970年代3年間留学、自然科学系修士学位取得、帰国後約30年、現在公務員管理職）

公務員の仕事を3年間休職して留学した。大いに努力をし、留学は人生の転換点となった。留学当初はあまりの文化差に、髪の毛が抜けたり体重が激減したりした。言いたいことは言う性格なので、過激な言動で周りを驚かせることもあった。教員に対しても、素直に従うだけではなかった。でも留学中に日本人の友人がたくさんできて、すっかり日本の生活に慣れ、帰国後再び自国に慣れるのがたいへんだった。

日本人の表面的なコミュニケーションスタイルには戸惑った。手伝うよと言われて本当に頼みに行くとは実はその気がなかったり、宿題を皆でやらないで授業に行こうと打ち合わせをしたのに、私以外は皆やってきたりという経験をした。日本人の多くは、相手を傷つけないように話したり陰で不平を言ったりしても、結局、上の人に従っているようだ。自国の人たちは透明ではっきりしている。教員に対しても、皆で協力して抗議する。日本の大学で一番話が合ったのは、はっきりものを言う掃除のおじさんだった。

日本人の両親の元で日系二世として育ったが、日本に留学して自分が日本人でも〇〇人でもないと感じて大きなショックを受けた。しかし、今では自分のアイデンティティーを見出し、それを認めるようになった。日本と〇〇の両方の文化を持っていることを豊かなことと、肯定的に感じている。

帰国後すぐは以前の職位に戻ったが、自分から希望して管理職となった。給与は据え置かれたが、その10年後に国で大きな問題があった時にその解決にあたり、実力を評価されてやっとな昇給があった。これまで様々な国へ出張して視野が広がったが、大切なのは内面の変化だと思っている。日本には「負けて勝つ」という考え方があるように、私は物事を行う前によく考えて企画を立てるようにしている。留学時代の指導教員から責任感についても学び、現在の仕事でも、部下に対して「あなたたちが失敗することは、私が失敗することだ」と伝えて責任ある仕事を促している。

留学中に学んだことは、この30年間ずっと仕事で活かしている。部下たちもそれを学んで、計画的に物事を組織したり、管理したりするようになっている。1990年代には日本の経営理念

がこの国でも注目され、清掃、秩序、維持管理、といったような規律面が強調され、私の職場でも毎年一回、何千人という職員全員で大掃除をするようになった。

職場ではこのように、専門分野で仕事をし、多くの人たちに留学成果を伝え、影響を与えている。しかし家庭では、独身で過ごしてきたので、それができない。年老いた親と同居しているので、長期の旅行ができず、日本へも一度、20年前に出張の帰りに寄って、元指導教員に会っただけである。研究室の他の日本人学生たちは皆、専門以外の分野で働いているらしいので、私は運がよかったと思う。日本へ行っていなかったら、今のような仕事はできなかったと思う。

日本留学によって自国の他の人々より力をつけて、周りからも信頼を得ることができるので、帰国後少し安心してしまい、努力を怠ったように思う。もっと時間を有効に使って努力していれば、さらによい結果があったと思う。

日本は、文化も考え方も全く異なる別世界なので、留学生は批判ばかりしているのではなく、異文化を受け入れて理解しようとしなければいけない。女性留学生だと2倍たいへんだし、日系人留学生は3倍苦勞する。つらくても自分は自分と思って努力するしかない。

ルルデスさんは、前例のシルビアさんと異なり、日系人で、職業経験もあって留学し、様々な場面で反発や衝突もしながら、努力して留學生活を送ったようである。日本人学生たちと共に研究室の生活を送り、成長したと感じている。現在では留學経験が生かされ、自信を持って多くの部下に影響を与えている様子が伝わってきた。

日系人であるがために悩んだり苦勞したりしたこともあるようだが、現在では日系人としてのアイデンティティを肯定し、それを喜びとして生活している。

個人生活の中では、独身で子どもがいないことを物足りなくも感じているようだったが、仕事で活躍する毎日に、充実感を持っている様子であった。

4-4 ホセさん（非日系、男性、1970-80年代に4年間留學、社会科学系修士学位取得、帰国後約25年、現在日系企業勤務）

戦後の急速な経済発展や日本文化に興味があって、大学卒業後すぐに日本に留學した。留學時代は趣味を通して多くの友達ができ、大きな不適應もなかったが、日本での人間関係の希薄さだけはつらかった。パーティーに行っても、踊ることもなく座って食べたり話したりするだけだし、女性と歩くのに手をつなごうとすれば人が見ているからやめてほしいと言われ、恋人と出かけるのはいつも友人たちと一緒に、夜に皆でさようなら、と信じられない付き合い方だった。70年代の日本は今よりずっと伝統的だったのだろうが、ラテン人なら誰でも、日本では感情面でそういう経験をするだろう。自分はその不足を、趣味の世界で補っていた。帰国後気付いたのだが、なんと私もそのような人間関係を取り入れてしまったようで、白髪がはえて髭も白くなっている今も、自文化風の愛情表現ができないでいる。

留学中は、日本語を苦勞して学び、入学試験を日本語で受けて合格した。世界第二の經濟大國日本の文化を学んだし、他の地域についても興味を持ち、グローバルゼーションという言葉が使われる前から世界について考えていた。様々な国の留學生がいたので、異文化・言語にも興味を持ち、今日に至るまで様々な外國語を習得してきたし、これからもさらに多くの言語を学びたいと思っている。

帰国後は、留学時代に指導教員から紹介された日系会社で働いて、日本との間を行ったり来たりしながら、10年後に渡日し、日本で2年間仕事をした。留学経験があったおかげで、日本での仕事は順調にいった。

日本では、「以心伝心」ということを学んだ。ラテンアメリカや西欧ではもっと直接的、時に攻撃的な話し方をするのが、日本では間接的に話すし、相手を尊重して相手の気持ちを察することが求められる。これが、自国と日本の間で仕事をするときに非常に役に立っている。

日本から自国への技術移転にも25年以上、大いに貢献している。政府関係者や企業関係者の会議の通訳をしたり、技術関係につながる本の翻訳をしたりした。会社では、日本人と自国の労働者との間で、考え方や感じ方の違いの橋渡しをするようにしているので、国にある日系企業の中でもこの会社はとてまうまくいっている。国際展示会や国際セミナーでも、言語だけでなく文化の通訳・翻訳を行っている。

日本でついた習慣は今も残っている。踊るのが大好きな自由人だったのが、すっかり真面目一本になったし、麵類を食べる時につい音をたててすすり、周りの視線を浴びたこともある。時間厳守も、ずっと残っている習慣だ。日本に留学したことで、周りの人々から一目おかれるし、自分でも実際、専門性においても文化的にも豊かになったと感じている。

これまで私はずっと日本文化と接しながら、自国とは極端に異なる環境で生きてきたので、現代のラテン文化から取り残されてしまったように感じることもある。ラテン人の愛情の深さを改めて大切に思い、前の自分に戻りたいと思う時がある。また、留学前はカトリック教に関して抵抗感を持っていたが、様々な地域で人々がそれぞれの宗教や信仰を持っていることを知り、自分の宗教を深く知ろうと思うようになった。今も聖書を読んだり、ミサに行ったりしている。自分の根源に戻って「知の泉」を見つけたと感じている。

留学中に結婚した日本人女性との間の子どもは、自国で専門職を持って活躍している。

日本には經濟だけでなく文化的にも深いものがある。今後日本に留学する学生たちには、貴重な留学の機会を最大限に利用して学んでほしいと思う。

ホセさんは、日本では特に趣味を通して多くの友人を得て、日本語も上達したという。通訳や翻訳ができるレベルまで日本語を習得し維持していた。

仕事の中で専門性や日本語・日本文化の知識や経験を大いに生かし、日本と自国との貴重な架け橋の役になっていることに満足し、両国の技術交流に多大な貢献をしていた。人間的にも、

国際性を身につけ、視野が広がり、それを役立てることに喜びを感じているようだった。

個人生活の中では、あまりに異なる文化の狭間で30年という年月を過ごしたため、自国の愛情深い人間関係をより大切に感じているのに関わらず、そこに戻っていけない自分を感じ複雑な思いを抱いていた。その中で、多言語・多文化をさらに学び、自文化についても探求を続けている様子がかがわれた。

4-5 アンтониオさん（仮名）（非日系、男性、1970年代後半2年間留学、文系研究生、帰国後約30年、現在大学教員）

小さい頃から日本には興味があって、大学では東洋文化を専攻していた。30歳の頃留学し、留学中は、日本人とだけ付き合うようにして日本について学び、専門を深めた。手紙でしか母国との連絡ができない時代、このまま留学を続けると自分は日本人になってしまうと思い、一人っ子なので親のことも考えて、2年後に帰国した。（ラテンアメリカの友人からも「2年以上日本に住むと、母国に戻れなくなる。戻っても日本人として戻ることになる」と忠告を受けていた。）日本で日本人女性と結婚し、約30年間、自国で大学教員として日本語や日本の歴史文化の教育に携わっている。留学後日本へは何度か行ったが、日本で仕事をしたり生活したりしようとは全く思っていない。留學生活と違って、サラリーマン生活はストレスが大きすぎると思うし、妻も日本の生活はたいへんだと言っている。家族皆、すっかりこの国の人になっている。

帰国後の1年間は、留學経験者に対する職業上の嫉妬のようなものを受けて、全く仕事につけなかった。その後教員職を得たが、大学の経済的問題などから、自分の専門の学科が設立に至らず、日本語教育中心に携わっている。言語教育に様々な文化的要素を入れて、日本社会や日本文化についても教えている。漢字の歴史についての教材も作成した。日本語がきっかけになって、それぞれの専門で日本留学を決めた学生たちもいる。彼らには例えば、挨拶ひとつでも、言葉だけを教えるだけでなく、身体接触がないということで日本人に拒否されたと感じないように、またバスの中では、降りる前から我先に慌ててドアの方へ行かず、バスが止まってから落ち着いて降りることなど、日々の生活を通して文化を伝えるようにしている。ラテンアメリカ人にとって日本は全く異なる世界なので、留學は非常に重要な機会となっている。

現在自国では、日本のアニメや漫画、歌などが流行っていて、以前興味を持たれていた武道などは韓国や中国のものにとって代わられている。歴史文化の分野では公的または組織的な支援が得にくいので、自国の自然開発などのプロジェクトにおいて、日本の歴史から学べることを提供するような活動もしている。これまで30年間、東洋の歴史文化専門の学科創設に向けて努力してきたが実現できなかった。現在は日本語教育を活用して、歴史文化も伝えるようにしている。

アントニオさんは日本の歴史文化に深い造詣を持ち、それを更に研究して次世代に伝えることに継続的に取り組んできた様子がかがえた。酒の升やふろしきなどを教材として持ち、日本についての壁新聞を大学の廊下に貼って学生や教職員が読めるようにしていた。しかし、国の経済状況や日本文化に対する認知の変化に影響を受けて、希望通りの研究・教育を組織的に発展させることは難しいと考えており、言語教育を活用しながら自分の専門を地道に続け、学生たちに影響を与えているようだった。

この元留学生は根からの研究者として、流行に流されることなく、飽くまでも自らの専門領域を大切にしていち極め、伝えていた。このような活動が少しずつ成果を見せるには、またさらに20年、30年とかかるのかもしれないと感じた。

4-6 ファンさん（仮名）（日系、男性、工学系専攻修士課程修了、1970年代後半～80年代3年間留学、その後続けて2年間日本で就職、帰国後約25年、現在事務所を共同経営）

4～5年の勤務経験を経て、妻を連れて日本に留学し、子どもも日本で生まれた。著名な専門家である指導教員の元で研究し、大きなプロジェクトにも参加した。（残念ながら教員は既に亡くなっている。）留学とその後の日本での仕事を通して、専門についての知識が深まり視野が広がり、技術的にも、貴重なプロジェクトの様々な過程に関わって学んだ。分担の中で持ち分の仕事だけをするのではなく、過程も含めて総合的にプロジェクトを考えるようになり、専門に対する視点が大きく変わった。

その頃の日本は1週間に1回は徹夜して働くのが当たり前のような時代で、事務所には仮眠室まであった。酒を飲みに行っても、同僚たちの頭の中は仕事のことで一杯だったようで、彼らの仕事に打ち込む姿勢には、学ぶことが多かった。

政変で、海外にいた国民が帰国する機運が高まった頃、私も留学後5年ぶりに帰国した。しかしやがてインフレがひどくなり、80年代後半には超インフレとなった。その時日本はバブル期で人手不足となり、日本語や日本文化に通じた日系人の専門家を探していたため、再渡日して4年間プロジェクトに関わった。バブルがはじけた後も3年間、自国の不安定な経済の元では取り組めないようなプロジェクトに関わって、技術を磨くことができた。

自国に戻った90年代後半は社会が安定し、自分達の事務所も仕事が多くなり、大きなプロジェクトも引き受けた。2000年代になって自国でまた景気が悪くなった頃、日本では景気がやっと回復して、安い人件費を求めて仕事の一部を中国など海外に発注していた。インターネットが盛んに使われるようになった時代で、自分の事務所も日本の会社と共同作業をするようになった。時差を利用して、24時間体制で操業するというパイオニア的事業だったが、ソフトの互換性の問題や、電話回線の問題、こちらの日曜にも仕事をしないと日本の月曜に間に合わないなど、結局「拷問」のような1年間だった。その後も、自国の経済状況に影響されながらも、日本の会社と共同で仕事をしたりしながら、他国の会社と合同で事業を進めるノウハウを積ん

できた。

日本で勉強し仕事をしたことで、周りの人皆に、人格が変わって日本人のようになった、と言われる。自分にも他人にも厳しくなったのだと思う。日本と自国の労働環境は非常に異なっていて、自国では、家族のこと、路上での安全、様々な手続き等、仕事にも心配が絶えないが、日本では、仕事に集中できるように環境が準備されている。社員寮が用意され、子どもたちは安全に学校へ通え、私は仕事だけに専念できた。そういう環境で、仕事に対しての厳しさが培われたのだと思う。現在の同僚や部下には、過度に厳しさを要求して摩擦を起こさないよう、配慮している。日本では徹夜後次の日も普通に働くことを経験したが（現在の日本はもっとソフトになったと聞いているが）、自国では、どうしても徹夜が必要だった場合は翌朝には帰宅してその分を取り戻す、という具合である。

子どもたちは日本でかなりの年月を過ごした。それぞれが日本への異なった思いを抱きながら成長し、帰国後も日本語を一生懸命勉強して能力試験に合格した子どももいる。

日本で学んだことの中には自国で活用できないものも多い。しかし 60 歳近くなった今、現実的な目標として、教えている大学で日本での経験、特に専門に対する真摯な態度というものを最大限に伝えていきたいと思っている。

留学中、著名な指導者のもとで知識も経験も最大限に積み、研究や仕事に専念してきたようである。留学後 30 年間の日本と自国との経済社会状況の大きな変化に、時に翻弄されながらもそれを活かしながら実力をつけていき、現在では日本だけでなく多くの国々と連携しながら専門性を発揮しているようであった。一方で、若い大学生たちに専門分野の知識や経験を伝えるという活動もし、日本関係の展示会などの際には、責任者として活躍していた。

面接では、その活躍にも関わらず派手さは全く感じられなく、彼の言葉にもあったような専門への真摯な態度が感じられた。家族と同居しての合計 10 年間以上に渡る日本滞在中、研究と仕事に熱中することができたという。日本での労働はともすればストレスが多いと言われる中で、仕事に集中できる環境がある社会を高く評価し、専門性の追求を重要に思っている様子であった。

家族について語る様子からは、留学中から一貫して家族の支援が大きかったことが感じられた。日本留学を機に、揺れ動く社会の中で努力をしながら、日系人であることも活用し実力をつけ、それを次の世代に伝えていっている事例である。

5. 事例考察から

留学後約 30 年を経た元留学生 13 名は、医学および水産学を専攻した 2 名以外は、上記 6 名の事例のように研究生または修士課程の大学院生として留学していた。（その後の留学生は、理工系を中心に、博士課程修了生も多くいた。）当時は博士課程の学位取得が現在ほど一般的でな

かったことや、アントニオさんが語ったように、日本と母国との文化差から「2年以上日本に住むと、母国に戻れなくなる。戻っても日本人として戻ることになる」という危惧、また、シルビアさんのように、女性の社会的状況が要因となって、修士課程までで留めたのかもしれない。しかし、日本留学の事実だけでも自国で評価される場合が多く、時には周りの人たちからの嫉妬も生んだほど、成果として感じられていた。

さらに、その後の元留学生たちの多くが、学んだ日本語はあまり覚えていないと語ったのに対して、この時期の留学生の多くが日本語をかなりのレベルまで習得し、人によっては仕事の中でも活用していた。英語を教育言語とした大学院コースがまだほとんど開設されていない時代であり⁵、留学中の日本語習得の必要度が高かったと思われる。

留学後母国に戻って留学成果を活かすか、アメリカ合衆国などの第三国で生活をするかについてはマリアさんが触れていたが、例えば、ペルーの元留学生会に登録されている300名以上の元留学生の、3分の1以上が現在外国に滞在しているという（APEBEMO 2006）。これを頭脳流出の問題として見ることもできれば、ある留学生が語ったように⁶「外国から、より有効に母国に貢献する」と理解することもできる。または、2008年時点でペルーの人口の11%以上が海外に在住しているという数字から見ても（中川等 2010:139）、歴史を通して人の移動があたりまえの社会においては、帰国とか流出というような考え方自体が馴染まないのであろうか。どこに住むかよりも、母国やそこに住む人々への貢献、母国と留学先国の交流、ひいては世界平和への貢献などを総合的に考える視点が必要とされているのかもしれない。

1970年代から現在に至るまでの30年間に、日本とラテンアメリカ各国の政治経済には大きな変化があった。日本の経済発展や日本企業の経営方法が注目を浴びた時代に、日本への高い評価をバネにして進路を拓いていったシルビアさん、二国間の政治経済状況の変化によって進路を選びながら実力をつけたファンさん、日本との経済格差が大きい自国の人々の苦境を理解して、その支援に関心をより強くしたマリアさん、どんな時代も専門性を根気よく高めていったアントニオさんなど形は様々であるが、超インフレ、独裁政権から民主化への変化などを経験したラテンアメリカ（中川 2010:36）や、この間の日本経済の激動は、元留学生たちへの留学効果やその波及に影響を与えてきた。

文化的には、日本文化と自文化の中で活躍しながらも強い異質性の狭間で複雑な思いをするホセさん、専門は日本に関連していても自分のアイデンティティーは自国にあるとしているアントニオさん、葛藤の末日系人としてのアイデンティティーを受け入れ満足感を持つルルスさんなど、それぞれが自分なりの距離のとり方で、両文化のバランスをとっているようだった。地理的にも文化的にも距離がある日本とラテンアメリカの間で、両文化を知りそれを伝えていくことの難しさと、元留学生だからこそそれが可能であることが実感された。

ラテンアメリカは人種的にも多様で、今回面接した元留学生たちも、西欧系、先住民系、その混血の容姿を持つ人や、日系人などのアジア系、またはアフリカ系の容姿を持つ人などがい

た。日系人のルルデスさんが「日本では、日系人だと2倍、それで女性だと3倍苦勞する」と語り、西欧系の容姿を持つ留学生が、日系の留学生仲間たちが差別を受ける様子を見てつらかったと語った(田中 2010) ように、ともすれば日系人は、日本人的な容姿ゆえに、社会から日本人であることを暗黙のうちに期待されたり、その期待通りに振る舞えないことを非難されたりすることがあったようである。これは日系人ではあるが西欧系の容姿を持つ元留学生たちからは、日系人であるがための苦勞については語られなかったことからわかる。一方アイデンティティーの問題はほとんどすべての日系留学生が語っており、現在では、日系〇〇人としてのアイデンティティーを見つけ、肯定的に感じていた。

地理的に最も離れており、行き来するには時間的・経済的負担が大きいため、本国と日本を股にかけて活動するといった元留学生は少なかった。フアンさんやマリアさんのように両国の政治・経済状況を利用して両国間で職場を何度か移した元留学生や、本国から研修生を日本に送る仕事をしているため両国を行き来している元留学生が数名いた以外は、多くの元留学生にとって日本は近くて遠い存在とならざるを得ない様子であった。元留学生たちのほとんどは、ルルデスさんのように、20年前出張の帰りに一度だけ日本に寄ったことがあるとか、日本人の妻と数回日本を訪れただけだとか、またはマリアさんのように、いつか日本での研修や研究の機会が得られることを、具体的に、人によっては漠然と、待ち望んでいるようだった。奈倉(2009)が中国の元留学生について考察した制約「教育制度」「ビザ制度」「経済格差」とは異なる、「地理的」「時間的」「経済的」な制約が、ラテンアメリカの元留学生たちにはあると言える。現在50歳代、60歳代の元留学生たちにとっては体力的な制約も考慮すべき時期になるであろう。(実際筆者にとっても、経済的な研究助成を受けることができなければ、ラテンアメリカへの調査旅行は不可能であったと言える。)

それらの制約の中で、元留学生たちは、職場や家庭など自らが可能な領域において、同僚や、次世代の子どもや若者たちに、様々な形で日本留学の成果を伝えていた。マリアさんが伝える日本の漫画やアニメ、他人を配慮する言動や厳しき、シルビアさんやルルデスさんが研究・教育の中で伝える職業倫理やチームワーク、フアンさんやアントニオさんが教育や職業を通して伝える専門性に対する真摯な態度や深い専門分野、ホセさんが貢献している日本企業のラテンアメリカ地域での活躍などすべてが、今後さらに20年、30年を経て、次世代からさらに受け継がれ、広がりを見せるものであろう。

6. おわりに

日本の留学政策は、2008年、留学生受け入れ30万人計画の中で大きな転換期を迎えたと言える。留学生受け入れの主な目的が、知的国際貢献や国際友好親善から、日本のグローバル戦略(国内の高等教育の国際化や高度人材の獲得など)へと、その軸を変えたのである⁷⁾。

今回考察の対象とした30年間は、長い歴史の中で見ればほんの短い期間である。しかしこ

の30年の間にも、世界情勢は大きく変化し、日本の世界における位置も予想外に変化し、それによって元留学生の進路も影響されつつ発展している。時には時代の変化を活用しながら、しかし変化を超えて、社会や次世代へ、日本留学の成果を伝えている元留学生たちの姿が見られた。伝えられた成果は、また数十年の時をかけて、醸成されていくものであろう。

それぞれの時期に最も適した留学政策を査定して実行するのは勿論必要なことであろう。しかし留学の成果が長期にわたって次世代に繋がり、社会・世界に波及していくことを考えた場合、時代に翻弄されない、留学の普遍的な価値を視野に入れ、各地域の特性も考慮した留学政策を考えていくことも必要だと考えられる。

ラテンアメリカのように日本と行き来するには地理的、時間的、経済的制約を強く受け、なおかつ文化的距離も大きいと考えられる地域との学術・文化交流にあっては、元留学生たちはその立役者として貴重な存在であることがわかった。留学成果がより活かされるような環境整備に一層の支援が必要であり、長期に渡る元留学生支援の視点も入れることが重要であろう。

注

- 1 High context communication(グループ内の人々が共有する経験や理解が多いため、伝える内容を言語化する度合いが低いコミュニケーションスタイルを意味する。) Storti (1999:99) は、日本人のコミュニケーションスタイルを世界で最も高文脈であるとしている。
- 2 マチスモ (machismo) と呼ばれ、ラテンアメリカ社会の人間関係の特徴のひとつとして社会学や心理学の分野で語られることがある (Brusco 1995 など)。
- 3 ラテンアメリカの特徴的な価値体系のひとつとして「家族友人に人間関係の中心をおく」ことが挙げられ (中川 1995)、元留学生との面接 (田中 2010) の中でもしばしば、組織内の上下 (主従) 関係には年数を経ても馴染めないことが報告された。
- 4 日本人が欧米人に接するときと、それ以外の外国人に接するときとは態度が異なっていると感じられることは、しばしば指摘されてきた (岩男・萩原 1988:132 など)。
- 5 英語による講義は1983年の「留学生受け入れ10万人計画」を機に、少しずつではあるが各大学で開設されるようになってきている。
- 6 田中 (2010) には、国内に住む元留学生への面接も含まれた。自国以外に住む元留学生の自国への貢献については、今後詳細に検討すべき課題である。
- 7 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm による。

引用文献

- 岩男寿美子・萩原滋 (1988) 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』、勁草書房。
- 遠藤誉(2002) 『帰国アジア元留学生の日欧米比較追跡調査による留学効果に関する研究』、平成11-13年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書、筑波大学。
- 権藤與志夫 (1991) 『留学の効果と影響に関する国際比較研究』(平成元・2年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、九州大学。
- 佐藤由利子 (2004) 「政策評価マトリックス (PEM) を使った定量的政策評価の事例—イ

- インドネシアとタイに対する日本の留学生政策評価一」、『日本評価研究』、日本評価学会。
- 田中京子 (2010) 「日本留学の長期的効果と波及—ラテンアメリカ出身留学生の場合」『留学生交流・指導研究』 Vol. 12, 国立大学留学生指導研究協議会。(2010年3月)
- 中川文雄・三田千代子 (編) (1995) 『ラテンアメリカ 人と社会』、新評論。
- 中川文雄・田島久歳・山脇千賀子 (編) (2010) 『ラテンアメリカン・ディアスポラ』、明石書店。
- 奈倉京子 (2009) 「日本からの中国帰国留学生の自己実現と「制約」に関する事例的考察」、『中国研究月報』、[社]中国研究所。
- APEBEMO (2006) *Directorio APEBEMO 1996-2006*, Asociación Peruana de Becarios del Ministerio de Educación del Japón (Monbusho).
- Brusco Elizabeth E. (1995) *The Reformation of Machismo*, University of Texas Press.
- Storti Craig (1999) *Figuring Foreigners Out*, Intercultural Press.
- Tanaka Kyoko (2003) ”Estudiantes provenientes de Latinoamérica: Su adaptación a la cultura japonesa y readaptación a su propia cultura”, Mito Hiroyuki ed. *La inmigración Latinoamericana en Japón*, Universidad de Nagoya.

*本研究は、平成19・20年度科学研究費補助金（基盤研究C）対象研究の一環として行った。調査に協力してくださった元留学生と関係者の皆さまに感謝いたします。